

『ベネディクトゥス』 井上隆晶牧師

創世記 22 章 15～18 節、ルカによる福音書 1 章 67～80 節

①【口が利けないことの理由】

今日から待降節に入ります。クリスマス物語に最初に登場するのは、洗礼者ヨハネの両親である祭司ザカリアとその妻エリサベトです。二人共神を信じる正しい人でしたが、彼らには子供がなく、二人共すでに歳をとっていました。ザカリアは神殿の聖所で香を炊く奉仕をしているとき大天使ガブリエルが現れ、妻エリサベトが子供が産むことを告げられますが、それを信じられなかったザカリアは口が利けなくなります。ガブリエルは「**時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。**」（ルカ 1：20）と言いました。神様の救いの業というのは、人間の条件に関係なく、時が来たら実現するのです。

●昔の修道士はこういいました。「いくら祈ったからと言って、太陽が昇るのを早くすることは人間にはできない。しかし太陽が昇った時、目覚めて準備していることはできる。」**私たちに出来る事といえば、神の業を黙って受け入れるだけなのです。人間は手出しも、口出しもしてはいけません。**

同じ天使ガブリエルのお告げを聞いても、ザカリアは口が聞けなくなりましたが、マリアは命をその胎内に宿しました。命を宿さなくなった神殿・古い祭司制度は廃止され、新しい命を宿す神殿として「マリア」が登場します。口が利けなくなったのは古いものに仕える祭司たちの言葉は死語になっているということの象徴でもあります。しかしザカリアは、イエス様に仕えることをもって、再びその命が回復してゆき、新しい言葉（預言）を語るようになるのです。

②【主はその民を訪れて解放し】

子どもが生まれた時、祭司ザカリアは口が開き、神を賛美し、聖霊に満たされて預言をしました。これは聖書の中に出て来る 8 つの歌の一つで、教会で歌われるようになりました。この預言の最初の言葉「**ほめたたえよ**」をラテン語で「ベネディクトゥス」というので、この歌全体もそう呼ばれています。「**ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を僕ダビデの家から起こされた。**」（68～69 節）「**救いの角**」というのはメシアのことです。（詩篇 18:2～3）神が人間のところにまで降って来てくださるのです。解放は人間の力によるものではなく、神によるものです。神が人間の歴史の中に入って来て下さることにより、人は解放されます。では何から解放されるのでしょうか。皆さんは何から解放されたいですか？ザカリアは「**我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い**」（71、72）と言いました。イスラエルの民はエジプトの奴隷、バビロンの奴隷、ペルシャの奴隷、ローマの奴隷を経験し、世界中に散

って迫害され、先の大戦ではナチス・ドイツが敵となりました。そんな彼らは強くないと、またどこかの奴隷になると思い、国家を作り、強力な軍隊を持ち、パレスチナ人を追い出し、テロリストを敵にしています。ロシアのプーチンもどんどん戦争を広めています。彼らの本当の敵は誰でしょう。パレスチナ人ですか？ NATO ですか？ そうではなく自分の中にある恐れではないでしょうか。神の約束を信じられないという不信仰ではないのですか。それが本当に戦わねばならない敵でしょう。それなのに問題を周りの国や人のせいにしていきます。彼らは国を失う恐れ、死の恐れ、迫害される恐れに奴隷になっています。

●ネヘミヤ記 6 章の興味深い話が出てきます。ペルシャからエルサレムに帰って来たネヘミヤは城壁の再建にとりかかりますが、それを気に食わない人たちが妨害をし、ネヘミヤを四回も呼び出しては殺そうとします。しかし彼がそれに応じないので手紙を送ります。そこには「あなたとユダの人々は反逆を企てていると、諸国のうわさになっているし、ガシムも言っている。…あなたはユダの人々の王になろうとしているということだ。…今このうわさは、王のもとに届こうとしている。早速相談しようではないか。」(ネヘミヤ 6:6~7) みんなが言っているという言葉ほど、私たちを脅かす言葉はありません。現代の若者たちは、人の言葉、人の評価を極端に恐れ、少しでも批判されると自殺してしまいます。神を恐れず、人を恐れるからです。

榎本保郎牧師の本にこんなことが書かれていました。「戦争中、兵役拒否を貫いた村本一生という人がいる。この人は日本人が当然のこととして参加していた戦争に参加することを拒否したのであるが、彼のことについて書いた稲垣真美氏は『きわめて少数の人だけがその拒否を貫き得たのは、内面の核として別の王国を持っていたからである』という言葉でその文章を結んでいる。他の人々とは別の王国、違った基準に生かされることによってのみ、人間は他者から自由になり、真理の道を歩むことができる。」

私たちが核として別の王国を持っています。神の国です。そこに行くためだけにこの世に生きています。私たちはこの世に既に死んだのです。私たちの基準はキリストです。人ではなく、キリストに喜ばれる事を考えて生きています。私たちがその王国から引き離せるのは、自分の罪だけであって、人は私に何もできません。私は人の評価など一切、興味がありません。神を信じる人は、本当の敵は自分の中にある罪であることが分かるのです。

③【神は約束を必ず守られる～希望をもつこと～】

ザカリアはこの救いは、最初アブラハムに誓われた約束であり、その後も、預言者たちによって予言されていたことであつたと語ります。「主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。」(72~73 節) このアブラハムと交わされた誓いと言うのは「あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によっ

て祝福を得る。」(創世記 22 章 16~18 節) というものでした。アブラハムはイエス様が生まれる 1800 年ほど前にいた人物です。その人と結ばれた約束を 1800 年後に果たしたと言うのですから、気の長い話です。でも私が感動するのは「主は…その聖なる契約を覚えていてくださる。」(72) という言葉です。私たちが忘れても、覚えておられるのです。私たちがどんなにマイナスの状況でも神は約束は果たしてくださいます。救い主は、ダビデの子孫から出ると言われていました。ヨセフはダビデの子孫ですが、当時のイスラエルの王は外国人のヘロデです。ダビデ王朝は落ちぶれ、貧しく、地に落ち、消えそうになっていました。人間の目から見れば、どう見ても無理に見えます。しかし神は約束を果たされました。神が一度、約束したならば必ずそれを実現させるのです。私たちがそのことに希望を持ちたいと思います。

●願望と希望は違います。願望は人から出ますが、希望は神から来ます。ヘンリ・ナウエンはこう言っています。

「私たちは願いごとでいっぱいです。そして私たちが待つときには、これらの願望にすっかり絡み取られてしまい…未来を思いどおり操作しようとする生き方になります。…しかし、ザカリア、エリサベト、マリア、シメオンは「願望」で満たされていたのではありません。彼らは「希望」に満たされていました。…希望は、何かを実現することを信じることで、それは神の約束に従って実現するのであり、単に私たちの願いによって実現することを意味していません。…私は自分の人生で願望を手放し、希望を抱くことが重要であることを学びました。…自分の身の上に起ころうとしている想像のおよばないことに信頼することです。それは、自分の将来を操作しようとするを手放し、自分の人生を神に決めていただくことです。」

自分の人生を神に決めていただくことは、神を信頼する信仰がなければできないことでしょう。この世や人を見るのではなく、心を神に向けなさい。人は神に向かって顔を上げる時だけ、希望を持ち、輝くことが出来るのです。私は神を信頼します。この世界はキリストが創られた彼の国です。今は地獄のような有様ですが、必ず神の国になります。神は約束を忘れないからです。顔を上げ、神に希望をもち、神の国の完成を待ち続けましょう。